

比況表現と引用形式：竹取物語の双括引用をめぐって

森脇，茂秀
別府大学：准教授

<https://doi.org/10.15017/25249>

出版情報：語文研究. 110, pp.50-64, 2010-12-26. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

比況表現と引用形式

— 竹取物語の双括引用をめぐる —

森 脇 茂 秀

一、はじめに

稿者は、これまでに比況表現の史的変遷過程を明らかにするために、仮名文に表れる「似る」「しく」「ごとし」「やうなり」について考察を行った。「似る」については、否定語と共に用いられる用法が多数であり、この点では、「トシ」というよりも、漢文訓読語「シク」「シカズ」等に近似の性質を有すること、「しく」については、肯定形として用いられるのは、上代に限られること、中古以降は、否定辞と共に起すること、中古では副詞「なほ」と共起する用例が多いこと、また否定辞と共起しない場合は、疑問詞と用いられるが、意味的には否定となること、倒置表現は「しかじ」に限定さ

れ、その文末は「む」などの「未定形」を表す助詞と共起すること、等を明らかにした。

また「ごとし」については、「会話文」中の「ごとし」の使用者は「男性」であるが、「地の文」の使用例もあり、決して「男性専用語」ではないこと、使用者は「女童」「僧都」から「光源氏」まで、広範囲に用いられること、比較対象となるものは、指し示す「指示性」（この用法は慣用句化）等、具体的に捉えられるものが多いこと、「日常語に近い」用法と「文章語」的用法の両者が存することを考察し、会話文中のそれは漢文訓読語を用いることで「僧都」のような「登場人物」を特定する「役割語」的用法も存するが、そうでない用法もあること、等を指摘した。

森脇（二〇〇八）では、終止形「やうなり」の承接に着目

して、次のような結果を得た。

「やうなり」自体については、「地の文」「会話文」「心理文」何れにも出現し、偏り等はないが、「やうなり」が所謂「比況表現」用法となる場合は、承接する語形が、「体言+の」「たり」「たら+む」「動詞（連体形）」であり、「地の文」の用例に出現するという傾向がある。

また、「やうなり」が「形容詞（連体形）」「形容動詞」「動詞（連体形）」「否定辞」「り」に承接する場合は、「(心情を含めた)ことながら(ありさま)」「目に見える状態」「推量される様子」となる。

ここで「やうなり」と「終止形」に限定したのは、その特質を明らかにする場合、終止形「やうなり」と「やうに」「やうなる」等をそれぞれ個別に考察し、それらの結果を踏まえて相互の関連を検討する必要性を感じたためである。^{注1)}
そこで小稿においては、これまでの考察結果を基に、引用文を導く「やう」を考察対象とし、「比況表現」と「引用形式」との関係について考察することにした、と思う。

二・一、引用文を導く予告語としての「やう」

「やう」は「萬葉集」には用例は見られないが、中古初期仮名文の「竹取物語」には39例、「伊勢物語」には7例、「土左日記」には18例、用例が存している。

竹取物語の「やう」39例中で最も多い用法は、「いふ」「申す」「のたまふ」「かたらふ」「いらふる」という「発話」を意味する動詞と承接し、引用節と承接する用例で、23例と、「やう」の約六割を占める。また「おもふやう」形は、竹取物語には見られず、「土左日記」の1例のみである。ただし、その例も「思へるやう」が先行しているが、「といふ」と結び、その動作は一致していない(以下、傍線は稿者)。

「用例1」聞く人の思へるやう、「なぞ、たゞことなる。」と、ひそかにいふべし。(土左日記 二月一日 48頁)

早く遠藤嘉基(一九三六)は、「申すやう…申す」といふ復誦形がこの(稿者注…竹取)物語に於いてやはり相當の数を占めてゐる「ことを指摘し、併せて」ことに源氏物語とか枕草子といふやうな女性の手によつてなされた女流文学の精

粹とも称せられるものになると、この復誦形はまづ殆んどないといつていゝ程である。この事實はこの復誦形が余り好ましい形式でない事を語つてゐるものと考へられる。「と、申すやう…申す」といふ「復誦形」の文体的な偏在を指摘している。

実際、「源氏物語」では、「やう」は900例、また「かやう」200例、「かうやう」33例、「さやう」140例、と多数の用例が存在するが、「いふやう」8例中、「竹取物語」のように「いふやう」が先行し、後に引用節が承接する例は6例、「おもふやう」では28例中、引用節が後に承接する例はないのであって、「いふやう」等の、引用文を導く「やう」は、「源氏物語」においては極めて少数である、ということができよう。

また、「夢」の引用形式については、詳細な研究があり、その全体像が明らかにされているが、「ゆめにみるやう…」「といった、「やう」を用いた引用形式は、「源氏物語」では一例のみであり、引用節を誘導する形は見られないのである。^(注)すなわち「やう」には、比況表現「コトシ・やうなり」という文体的対立と併せて、引用形式「イハク・いふやう」という複層的な対応関係があるのである。

この引用形式「イハク・いふやう」については、例えば『小学館 古語大辞典』には、「いはく」に、

「連語」(動詞)「いふ」の未然形「いは」+準体助詞「く」(言)のこと。…言(こと)には、「とあり、」和文で「いふやう…といふ」などというところを、漢文訓読文では「いはく…といふ」、または下を省略して「いはく…と」「いはく…」などとするのが普通。「語らへ」「申せへ」「告べらへ」などもこれに準じる。

と、和文語「いふやう」と漢文訓読語「いはく」との文体的な対立を指摘し、『日本国語大辞典 第二版』には、「いうよ」を見出し語に立て、品詞は「名詞」であるとし、次のように指摘している。

いう・よう(いふやう)【言様】「名詞」言った言葉を以下に引用するとき用いる。言(こと)には。言(こと)には。いわく。

(補注) 中古では、「いふやう」は和文に用いられ、これに対して、訓読語では「いはく」を用いた。

また、「いはく」については、

(一)「動詞」いう(言)のク語法(イ)(上)の句を統合して体言化し、名詞的に用いて(言)こと。(口)(副詞的に用

いて下の引用語句を導く) 言うことには。

(2) 「名詞」

と意味用法を二分した上で、次のように指摘している。

(語誌) 引用文を導く形式は、漢文訓読に由来して、「いはく…といふ」のように動詞を繰り返す用法が本来で、訓点資料では平安初期のもの、あるいは中期以降の殊に漢籍資料のものに多い。訓点資料でも仏典の方では後ろの「いふ」を略して「と」のみを添えたり、「といふ」すべてを省略する形も多く見える。

「引用文を導く形式」である「イハク・トイフ」という引用形式の出自については、このように「漢文訓読に由来」するとする説と、大坪(一九八一)が詳述する如く、「日本語固有の形式」であった、とする説があり、ここでは早計な結論は控えたいが、大坪(一九八一)では、「トイフを伴はない、イハク・トヤ、イハク・の形が多く現はれて来る。これは、漢文訓読の際に行はれた省略の結果であろう。」とし、遠藤(一九三六)で指摘した「復誦形」のバリエーションについても詳細に考察している。『日本国語大辞典 第二版』では、

「省略」された「イハク・ト」「イハク・」形は、訓点資料における「漢籍」、「仏典」といった文体的な相違である、とし、漢文訓読語「イハク」の語史については問題が存している。また、峰岸明(二〇〇一)『訓点語辞典』には、次のような指摘がある。

「イハク」(日)この語は、会話文などの引用に当たって用いられるが、その引用の基本形式には a「いはく、……といふ」 b「いはく、……と」、c「いはく、……」三形式があるが、平安初期には (ママ) のように通常、文末を補読した。しかし、院政期には既に b c の形式が一般化している。また、「いはく」が受ける構文には「いはく」が体言の格を留める ^ 体言+の(が) + いはく v と、「く」が全体を統括して体言化する と解釈される ^ (体言+ + いはく) v ^ (動詞+ + いはく) v v と二種のものがあることが指摘されている。

平安初期には a「いはく、……といふ」という「補読」であったものが、院政期には b「いはく、……と」、c「いはく、……」 という形式が一般化した、と述べ、引用節に下接する「といふ」には史の変遷がある、と指摘するが、また、『日本国語大辞典 第二版』との関係からすれば、「いはく」が体言の

格を留めるゝ体言＋の(が)＋いはくゝは、「上の句を統合して体言化し、名詞的に用いて」言つこと。「に」「く」が全体を統括して体言化すると解釈されるゝ(体言＋に＋いはくゝ)(動詞＋て＋いはくゝ)は、「副詞的に用いて下の引用語句を導く」言つことには。「に」に相当する、と考えられるであらう。

このような「いはく」の記述を踏まえ、引用文を導く「いふやう」の意味用法を考えて見たい。

二・二・二 竹取物語「いふやう」形

塚原鉄雄は、『国語学大辞典』「会話文」で、次のように定義する。^(注4)

直接話法の引用には、会話文の引用を予告する「いはく」「いふやう」「いうことには」などが、会話文の直前に位置する双括引用と、会話文の直前に位置しない単括引用とがある。

平安時代の和文では、『竹取物語』のような双括方式による会話文の数多い作品もあるが、『伊勢物語』のような単括方式による会話文の数多い作品が一般化した。さらに、

『源氏物語』など、複数の人物による会話文を並列して、一個の助詞「と」だけで統括する、単括方式の簡易化も頻繁になった。日記文学の地の文は、物語文学の会話文に近い文体と用語とで表現され、会話文体による地の表現の成立原型といえよう。

また塚原(二〇〇二)で「会話文」を、次のように「包摂」「並列」「連接」と三分類し、「やう」をつぎのように指摘する。

引用された会話文は、ゝ格助詞「と」「(＋動詞」「いう)」＋接続助詞「て」ゝの形式で接続語となるものと、ゝ格助詞「と」「(＋動詞)ゝの形式で下接動詞の修飾語となるものがある。修飾語となる引用では、下接動詞の種類のよって、会話文が下接動詞（「いふ」「のたまふ」など）の表現する行動の具体的な内容を示す包括関係を構成するためのものと、下接動詞（「のしる」「ねたむ」など）の表現する行動と共通の条件で成立することを示す並列関係を構成するものがある。接続語となる引用では、会話文が下接動詞の表現する行動を継起的に成立させることを示す連接（接続）関係を構成する。

() 『国語学大辞典』()

これら「く」「やう」「いふ」は、いずれも、体言としての資格をもち、やはり体言の資格もつ引用された会話と、同格に立つ意味で、同類とすることができるとして、やはり、包摂と並列と接続との用法を、それぞれ指摘し得る。(略)これらの中、並列と接続とは、いずれも稀であり、大部分は、包摂である。すなわち、これらは、本来的に、会話を引用するだけのために、用いられるものであって、それ以外ではなかったといえそうである。

竹取物語では次のような会話文に後続する語句がなく、後行する動詞が出現しない「双括引用」の用例はこの1例のみである。

「用例2」かぐや姫の言ふやう、「親のの給ふことを、ひたぶるに辞(いな)び申さん事のいとほしさに、取りがたき物を」。(37頁)

以下、塚原(二〇〇二)の分類に従い、竹取物語の用例を示す。

【包摂】

「用例3」これを見つけて、翁かぐや姫に言ふやう「我子の佛、変化の人と申しながら、こゝら大ききまで養ひたてまつる志おろかならず。翁の申さん事は聞き給ひてむや」と言へば、(略) (31頁)

「用例4」翁、皇子に申すやう、「いかなる所にか、この木はさぶらひけん、あやしく、うるはしく、めでたき物にも」と申す。(37頁)

「用例5」近く使はるゝ人々、竹取の翁に告げていはく、「かぐや姫の、例も月をあはれがり給へども、この頃となりては、たゞことにも侍らざめり。いみじく思しなげく事あるべし。よくく見たてまつらせ給へ」と言ふを聞きて、かぐや姫に言ふやう、「なんでふ心地すれば、かく、物を思ひたるさまにて、月を見たまふぞ。うましき世に」と言ふ。(58頁)

「用例6」をのことも申すやう、「さらばいかゞはせむ。難き事なりとも、仰せことに従ひて求めにまからむ」と申すに、(略) (45頁)

「用例7」(略)遣はしゝ男どもまゐりて申すやう、「龍の頸の玉をえ取らざりしかばなん殿へもえまゐらざりし。玉の取りがたかりし事を知り給へればなん勳当あらじとて、まゐり

つる」と申す。(48頁)

「用例8」中納言いそのかみのまろたりの、家に使はるゝ男
どものもとに、「燕(つばくらめ)の巢くひたらば、告げよ」
とのたまふを、うけたまはりて、「何の用にかあらん」と申
す。こたへての給ふやう、「燕のもたる子安の貝を取らむ料
なり」とのたまふ。男ども答へて申す、「燕をあまた殺して
見るだにも、腹に何もなき物なり。たゞし、子産む時なん
いかでか出すらむ。はらくかと申す。人だに見れば失せぬ」
と申す。又、人の申すやうは、「大炊寮(おほいつかさ)の
飯炊(かし)く屋の棟に、つくの穴ことに、燕は巢をくひ侍
る。それに、まめならむ男どもをめてまかりて、あぐらを結
ひあげて、つかゞはせんに、そこらの燕、子産まざらむや
は。さてこそ取らしめ給はめ」と申す。(50頁)

「用例9」日暮れぬれば、かの寮におはして見たまふに、ま
ことに燕巢つくれり。くらつまる申すやう、尾浮けてめぐる
に、粗籠に人をのぼせて釣りあげさせて、燕の巢に手をさし
入れさせて探るに、「物もなし」と申すに。(略) (51頁)

「用例10」翁答へていはく、「天下の事は、とありとも、かゝ
りとも、み命の危きこそ、大きなる障りなれば、なほ仕うま
つるまじき事を、まゐりて申さん」とて、まゐりて申すやう、
「仰の事をかしこきに、かの童を、まゐらせむとて仕うまつ

れば、宮仕へに出し立てば死ぬべし」と申す。(56頁)

「用例11」かぢとりのいふやう、「黒鳥(くるとり)のもと
に、白き波をよす。」とぞいふ。このことば、何とにはなけ
れども、ものいふやうにぞきこえたる。

(土左日記 一月二十一日 43頁)

このように、「包摂」の場合、会話文に前行する動詞と、後
行する動詞とは、同じ語であり、このことは大きな特徴であ
る、と考えられる。

また、次のような用例がある。

「用例12」これをかぐや姫聞きて、「この奉る文をとれ」と
言ひて見れば、文に申しけるやう、「略」と申して、「給は
るべきなり」と言ふを聞きて、かぐや姫の、暮るゝまゝに思
ひわびつる心地、わづらひさかへて、翁を呼びとりて言ふや
う、「略」と言へば。(略) (40頁)

「用例13」かぐや姫に、「はや、かの御使ひに対面し給へ」
と言へば、かぐや姫、「よきかたちにもあらず。いかでか見
ゆべき」と言へば、「うたてもの給ふかな。御門の御使ひを
はいかでおるかにせむ」と言へば、かぐや姫答ふるやう、
「御門の召してのたまはん事、かしこしとも思はず」と言ひ

て、さらに見ゆべくもあらず。

(54頁)

「用例14」翁喜びて、家に帰りがくや姫にかたらふやう、「かくなむ御門の仰せ給へる。なほやは仕うまつり給はぬ」と言へば、(略)

(55頁)

「用例15」翁いらふるやう、「なし給ひ。官冠も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ。さはあるとも、などか宮仕へをしたまはざらむ。死に給ふべきやうやあるべき」と言ふ。

(55頁)

「用例12」は、「文」という書面に述べられている内容を指し示す「双括引用」で、会話文に先行する動詞は、「申しけるやう」とあり、後行する動詞は、「と申して」であつて、「けり」がなく、前後の動詞句が完全に一致していない。塚原(二〇〇二)は、「竹取物語では、説明・ストーリーの記述・には、時の助動詞(筆者注「けり」)を用いるけれども、描写・情景の記述・になると、これを缺く。」とする。これは、竹取物語の「表現態度」を示すものとしても、また「包摂」用法としても重要な指摘である、と考えられる。

また、会話に先行する動詞が「用例13」は「答ふ」、「用例14」は「かたらふ」、「用例15」は「いらふ」であり、後行する動詞は「言ふ」と形態上一致していない。これらの関係に

ついて、後行動詞「言ふ」が、「答ふ」、「かたらふ」、「いらふ」を包摂する、とする考えは、意味論からしても説得力があり、塚原(二〇〇二)では、「包摂の場合、会話に先行する動詞は、後行する動詞と、同じ語であることが、圧倒的に多い。」より抽象的な広い概念を表す動詞が、会話に後行し、より具体的な狭い概念を表す動詞が先行するといえよう。(略) 同じ動詞と仮称したことは、実質概念において共通し、関係概念において矛盾しない動詞、というふうに規定することができよう。」と指摘している。

【接続】

「用例16」それを見れば、三寸ばかりなる人、いとつつくしうてあたり。翁いふやう、「我あさごと夕ことに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給ふべき人なめり」とて、手につち入れて家へ持ちて来ぬ。(29頁)

「用例17」燕も、人のあまた上りゐたるにおぢて、巢にも上り来ず。かゝるよしの返事を申したれば聞き給ひて、いかゞすべきと思し煩ふに、かの寮の官人、くらつまると申す翁申すやう、「子安貝(こやすがひ)とらんと思しめさば、たばかり申さん」とて、御前にまゐりたれば、中納言、額を合せてむかひ給へり。くらつまるが申すやう、「此燕の子安貝は、

悪しくたばかりで取らせ給ふなり。さてはえ取らせ給はじ。あなゝひにおどろしく廿人の人の上りて侍れば、あれで寄りまつて来ず。せさせ給ふべきやうは、このあなゝひをこぼちて、人みな退きて、まめならん人ひとりりを粗籠に乗せ握糸で、綱をかまへて、鳥の、子産まむあひだに、綱をつりあげさせて、ふと子安貝を取らせ給はんむ、よかるべき」と申す。中納言の給ふやう、「いとよき事なり」とて、あなゝひをこぼし、人みな帰りまつて来ぬ。中納言、くらつまろにのたまはく、「燕は、いかなる時にか子産むと知りて、人はあぐべき」との給ふ。くらつまろ申すやう、「燕子産まむとする時は、ををさゝげて七度めぐりてなん、産み落すめる。さて、七度めぐらんをり、引きあげて、そのをり、子安貝は取らせ給へ」と申す。(50頁)

【並列】

「用例18」翁の言ふやう、「御迎へに来む人をば、長き爪して、眼をつかみ潰さん。さが髪をとりて、かなぐり落とさむ。さが尻をかき出で、こゝらの公人に見せて、恥を見せんと腹立ちをる。(62頁)

「用例16」「用例17」は、会話文に後行する語が「とて」で

ある「連接」の用例であり、「とて」の意味用法については、森脇(一九九五)で述べたことがある。「用例18」は、「並列」の用例で、会話文に後行する語が「言ふ、すなわちへ発話」という意と直接的に関連せず、「やう」引用節は後行語「腹立ちをる」の「機縁」となっている用例である。これらの「連接」「並列」は、用例が少数であり、このことは、「やう」が、「本来的に会話を引用するだけのために、用いられる」(塚原(二〇〇二))とも考えられる。

では「やう」の意味用法と会話を示す「いふやう」とは如何なる関係として捉えることができるであろうか。

三、竹取物語中の「やう」

——「連体修飾成分+やう」と会話予示「やう」——

「用例19」かぐや姫答へていはく、「もはら、さやうの宮仕へ仕うまつらじと思ふを、しひて仕うまつらせ給はゞ消え失せなんす。御官冠つかうまつりて、死ぬばかりなり」。(55頁)

「用例20」かやうに、御心をたがひに慰さめ給ふほどに、三年ばかりありて、春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろく出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。(58頁)

「用例21」翁いはく、「思ひのごとくも、のたまふ物かな。そもくいかやうなる心ざしあらん人にか、あはむと思す。かばかり心ざしおろかならぬ人々にこそあめれ。」(32頁)

『小学館 古語大辞典』(山口佳紀執筆)には、「かやう」「さやう」など、接尾語として和語と複合する用法や比喻や引用などを表す形式名詞の用法は、漢語には例がな「い」ということを指摘している。竹取物語の「やう」には、「用例19」「ネ」「用例20」「か」「用例21」「いか」という副詞と承接し、「状態にある」ということを表す用例があるが、[△]「かやう」から「このやう」[△]と[△]という史的变化は、岡崎(二〇一〇)に、中古における「かやうなり」「かづやうなり」「かくやうなり」の用法については、小久保(一九七八)にそれぞれ指摘がある。指示詞と承接し、「やう」承接前部を指し示す用法は、漢文訓読語「ことし」にも見られ、「やう」の、「ありさま」「様子」という本義からしても、指示詞という「指示性」と「やう」の機能は、互いに聯関している、と捉えることができよう。

「用例22」その山見るに、さらに登るべきやうなし。

(38頁)

「用例23」嶺にてすべきやう教へさせ給ふ。御文、不死の薬壺ならべて、火をつけて燃やすべきよし仰せ給ふ。(67頁)

「用例22」「用例23」は、「やう」の用例である。

「用例22」は、「その山は見ると全く上る手段がないほどに険しい」と解釈できる用例で、ここでの「やう」は「方法・手段」という「ありさま」である、と考えられる。

「用例23」は、「竹取物語」最終場面であり、帝がかぐや姫を慕い「山頂でなすべき方法をお教えになる」と解釈できる。この「やう」も「方法・手段」という「ありさま」である、と考えられる。

「用例24」かくや姫すゑんには、例のやうには見にくしとの給ひて、(略) (46頁)

「用例25」皇子答へてのたまはく、「(略)ある時は、浪に荒れつゝ海の底にも入りぬべく、ある時は、風につけて知らぬ国に吹き寄せられて、鬼のやうなるもの出で来て殺さんとしき。(略)とのたまへば、(略) (37頁)

「用例26」世界の人の言ひけるは、「大伴の大納言は、龍の頸の玉や取りておはしたる」「いな、さもあらず。みまなこ二つに、すもゝ(杏)のやうなる玉をぞ添へていましたる」

と言ひければ、「あなたへがた」と言ひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、あなたへがたとはいひはじめける。(49頁)

「用例27」(略) 風いと重き人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、すもゝ(否)をふたつつけたるやうなり。(48頁)

「用例28」その山は、こゝにたとへば、比叡(ひえ)の山を二十(はたち)ばかり重ねあげたらんほどして、なりは塩尻(しほじり)のやうになんありける。(伊勢物語 九段 117頁)

「用例24」は、「会話文」中の用例で、大伴の大納言の発言中に「やう」が用いられている。ここでは、体言「例+」に「やう」が承接し、「かぐや姫を妻として据えるには、平生のままで見苦しい」と解釈できる。

「用例25」は、「会話文」中の用例で、くらもちの皇子の発言中に「やう」が用いられている。この用例は「AのやうなるB」で、「鬼のような怪物が目の前に立ち現れて」と解釈できる。

「用例26」は、「言ひけるは」によって会話文の引用を予告する、「双括引用」の「会話文」中の用例で、会話主は「世界の人」であり、「玉は玉でも、すもものような玉を持って

いらつしゃった」と解釈できる。かつこの用例も「AのやうなるB」である。

「用例27」は、「地の文」の用例で、「やう」は「たり」と承接し、「ちちらとあちらの目には、すももを二つつけたようである」と解釈できる。

「用例28」は「伊勢物語」の「地の文」の用例で、「富士山の(形状は、しほじりのようであった」と解釈できる用例である。

以上のように、これらは、存在する状態が、承接語と類同である、ある事物の状況をほかの事物と比べて表現する「比況表現」である、と考えられる。また、次のような用例がある。

「用例29」いづれの方とも知らず、舟を海中にまかり入りぬべく吹きまはして、浪は舟にうちかけつゝ捲き入れ、神は落ちかゝるやうにひらめく。(47頁)

「用例30」これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるゝやうにて、あひ戦はん心もなかりけり。(63頁)

「用例29」は「波は幾度も船にうちかかって海中に巻き入れんばかりになり、雷は落ちかかるようにひらめきかかるので

と解釈できる用例で、「やう」は「様子」「目に見える状態」である、と考えられる。

「用例30」は、かぐや姫が昇天するため、迎えの天人がきた場面で「家の内や外にいる人たちの心は、なにか物の怪におそわれるような気持ちになって、戦い合おうというような心もなくなったのである」と解釈できる。「ここの」「やう」は、「(心情を含めた) ことがら (ありさま)」である、と考えられる。

「用例31」かぐや姫、「何かかたからん」と言へば、翁、「とまれかくまれ申さむ」とて、出て、「かくなむ。聞ゆるやうに見せ給へ」と言へば、御心達、上達部聞きて、「おいらかに、あたりよりだにな歩きそとやはたまはぬ」と言ひて、うんじて昏歸りぬ。

(34頁)

「用例32」匠らいみじく喜び、「思ひつるやうにもあるかな」と言ひて、帰る道にて、くらもちの皇子、血の流るゝまで調ぜさせ給ふ。

(41頁)

「用例31」は、かぐや姫が五人の求婚者に難題を提示する場面で、翁の会話文中の用例で、「このように申しております。娘の申すようにお見せ下さい」と解釈できる。「この」「やう」

は、「聞ゆる」という連体形に承接しているが、「見せ給へ」という対象が「娘の申す(コト)」であると考えられる。したがって、この「やう」には、「(心情を含めた) ことがら(ありさま)」という「やう」の本義との共通項を指摘でき、また「みんなにきこえるように」大声で話さない。「の」ような、現代語「やう」の「時間的に主節の後に起こる事態を提示する」「目的・結果」「用法」と同質のものであると捉えることができるであろう。

「用例32」は、工匠の訴えにより、くらもちの皇子のはかりことが露見する場面で、「工匠どもはたいそう喜んで、」期待していた通りになったな」と言つて帰る」と解釈できる用例である。この用例も「あるかな」に対しての「意図」、あるいは「対象」が「思ひつる」であると考えられ、「時間的に主節の後に起こる事態を提示する」「目的・結果」「用法」と同質のものであると考えられる。

現代語の引用形式である、

早く帰るように言った。

雨が降るように祈った

の「ように」は、「それぞれ」ように「節の内容は、発話・祈願の内容であると同時に」言つ「祈る」という動作の目的・結果である」と考えられるが、この用法は、「竹取物語」

中の会話予告の「いふやう」を考える上で極めて示唆的である。すなわち引用句を導く「やう」は、会話文に後行する動詞句に対して「結果・目的」を提示する用法として捉えるのである。また、現代語「よつに」は、「に」が省略可能で、形態上も「よつ」と捉えることができるのであり、形態上の共通性も指摘できる。

但し、現代語「よつに」の場合、「間接引用」であり、「双括引用」で会話予告の職能を有する「やう」の「直接引用」とは相違すること、「やつに」の「祈願・目的」用法が中世期から出現する時間的な差異、「双括引用」が引用形式として衰退する理由等については、別稿を期したい、と思う。

「教授賜れば幸いである。」

(尚、本文は、『竹取物語』は、岩波書店『日本古典文学大系』、また、小学館『新編日本古典文学全集』を参照した。また「源氏物語」は小学館『日本古典文学全集』、『新編日本古典文学全集』、他は岩波書店『日本古典文学大系』に依った。また、私意に句読点等を改めた箇所がある。用例検索にあたっては、各種「索引」を利用して頂いた。)

注

注1 「やうなり」については、出現に文体的な偏りがあり、「専ら仮名文に表れる。中古から中世にかけての語。特に、中古で

は、漢文訓読文系の文章に用いられた「ことし」に対して、「やうなり」は和文で多く用いられた(『大辞林』)という指摘は、周知の事実であるが、意味用法の面からは、「ことし」と共に記述されることが多く、「やうなり」は「ことし」と同じ意味を表す(『日本文法大辞典』)等と、簡単な記述に止まることが多い。「比況」の定義については、「比況」とはある事物の状況をほかの事物と比べて表現するということがある」とする永野賢(『古代語現代語助詞動詞詳説』)に従う。

注2

源氏物語の「いふやう」に引用節が承接する用例は、竹取物語にみられた「包撰」「並列」「継起」が出現しており、引用節を受ける被修飾部は助辞「と」との間に修飾語を介在する用例がある。夢の引用形式については、山口佳紀(一九六四)、山口康子(二〇〇〇)を参照の事。

注3

大坪併治(一九八二)「引用形式におけるク語法」参照。引用形式のイハク・トイフが本来国語に存在した固有の形式か、それとも、漢文訓読の世界に成立した翻訳文法か、といふ点について考へてみよう。結論をいへば、私は国語固有のものであらうと考へる。

イハク・トイフは、奈良時代からすでに存在し、かつ広く用いられていた。

奈良時代に、イフ、及びこれに類する動詞を中心として、イハク・トイフ式の構文が発達したのは、話が長文になる場合に、最後に「トイフと言っただけでは、話の範囲が把握しにくいいため、まづ、イハクを置いて、話がこれから始まることを示し、終はつたところで、トイフを添へて首尾相ひ応ずるやうにしたのではないか。

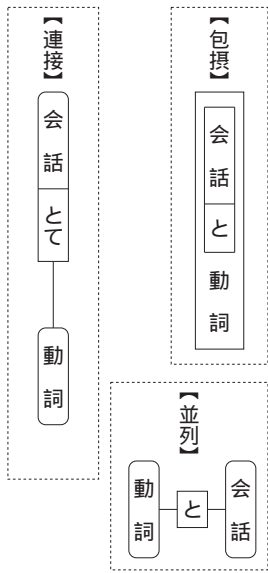
イハク・トイフは、イハクとトイフとが前後呼応することによつて完結すべきものであり、仮りに一方を省略するにしても、前のイハクを省略することは許されようが、後のトイフを省略することは許されないはずである。なぜなら、イハクは、「引用句+トイフ」に係る一種の連用修飾語と見られるが、トイフは、引用句を受ける述語だからである。(略)しかるに平安時代の訓点資料になると、トイフを伴はない、イハク・トイ、イハク・の形が多く現はれて来る。

これは、漢文訓読の際に行はれた省略の結果であろう。平安時代の和文でも、『古今和歌集』『土佐日記』『竹取物語』『宇津保物語』等に、若干イハクが登場するが、それらの殆どは、イハク・トイフであつて、イハク・は稀に見えるのに対し、イハク・トの例は全く求められない。(略)すなはち、訓点語の引用形式の内、イハク・トイフは、奈良時代以来の国語本来の構文を継承した古典文法、他の二つ、イハク・とイハク・トは、その省略形として漢文訓読の世界に成立発達した訓点語特有の文法と推定される。

注4 塚原は「会話の引用を予示する語句」として「やう」を挙げ

る。
 会話を含むセンテンスの中に、会話の引用を予示する語句の前行する場合を、検討してみたい。これは、まず、形態のうえからいえば、「いぶやう」「のたぶやう」「申すやう」「申しけるやう」「いらぶるやう」のように、「・やう」に導かれるものと、「いはく」「のたまはく」「の」とく、「・く」の先行するものとが、二大勢力となっている。ただ、「・く」の形は、「いはく」「のたまはく」の二種に限られ、「・やう」

が、「申す」「いらぶ」にまで及ぶのと比較すれば、固定化している観がある。(略)
 (153) (154頁)



注5 塚原鉄雄「会話の引用」『国語構文の成文機構』150頁
 また前後一致しないものに「申すやう…そす」形がある。
 「用例」翁かしこまりて御返事申すやう、「このめの童は、たえて宮仕へつかうまつるべくもあらず侍るを、もてわづらひ侍り。さりとて、まかりて仰せ事たまはん」と奏す。(55頁)
 「用例」宮つこまろが申すやう、「いとよき事なり。なにか心もなくて侍らんに、ふとみゆきして御覽らんせむに、御覽せられなむ」と奏すれば。(略) (56頁)

塚原鉄雄(二〇〇二)は、「これらの動詞から関係概念を除去すれば、いずれも「いぶ」に置き換えられる」とし、「包摂」の中にも含める。これらの用例の処理については、保留する。

(参考文献)
 遠藤嘉基(一九三六)「竹取物語の文章と語法」序説——特に對話の文について——(『国語国文』6・5 昭和十一年五月)
 山口佳紀(一九六四)『今昔物語集の漢文訓読文体と和文体——夢

の引用形式をめぐって——」(『国語研究室』3)(後『古代日本文体史論考』(一九九三)有精堂に所収)

小久保崇明(一九七八)「かやうなり」の活用について」(『解釈』24・4)

小久保崇明(一九七八)「かかやうのかたさへおはしましける」考——「かかやうなり」の発生の要因とその位相——」(『平安文学研究』59)

大坪併治(一九八一)『平安時代における訓点語の文法』(風間書房)

山口康子(二〇〇〇)『今昔物語集の文章研究』(おうふう)

塚原鉄雄(二〇〇二)『国語構文の成文機構』(新典社)

神谷かをる(一九八三)「引用形式からみた物語文章史」(『日本語学』2・2)

前田直子(二〇〇六)『ように』の意味・用法』(笠間書院)

関一雄(二〇〇九)『平安物語の動画的表現と役柄語』(笠間書院)

岡崎友子(二〇一〇)『日本語指示詞の歴史的研究』(ひつじ書房)

森脇茂秀(一九九五)『助辞』とての成立過程・意味用法をめぐって(一)』(『別府大学紀要』36)

森脇茂秀(一九九五)『助辞』とての成立過程・意味用法をめぐって(二)』(山口国文』18)

森脇茂秀(一九九五)『順接から逆接へ——助辞』とての逆接専用化への過程——』(『別府大学国語国文学』37)

森脇茂秀(二〇〇四)『動詞』似る』の意味用法について——平安初・中期の仮名文を中心に——』(『別府大学国語国文学』46)

森脇茂秀(二〇〇六)『中古仮名文における漢文訓読語』「ことし」の意味用法について』(『語文研究』100・101)

森脇茂秀(二〇〇七)『静態動詞』似る』の一形式——『源氏物語』

の用例を中心に——』(『別府大学国語国文学』49)

森脇茂秀(二〇〇八)『中古仮名文における』やうなり』の意味用法をめぐって』(『別府大学国語国文学』50)

森脇茂秀(二〇〇九)『動詞』しく』の意味用法をめぐって』(『山口国文』32)

(もりわき しげひで・別府大学准教授)